

共同研究会の主旨と目標——まえがきに代えて

日本の古都、京都では、古くから陶藝、染織、漆藝、絹織物など多くの伝統工藝が栄えてきた。しかし一九八〇年代よりこのかた、経済条件、労働状況などの変貌にもなつて、その多くが変質を迫られており、従業員数、生産高も落ち込みが顕著となつている。業種によつては、技能の伝承がもはや不可能という危機的な事態に立ち至つている（巻末の統計資料 p. xvi-xx 参照）。

こうした状況をまえにして、本研究では、伝統工藝や美術の研究者だけではなく、広範な関係者の参加を得て、京都を中心としたいわゆる伝統工藝の現状を多角的に分析しようと試みた。共同研究には、美術や工藝の専門研究者だけでなく、経済史、商工史の専門の研究者、手仕事現場を今も支える職人の方々、藝術家に加えて、企業経営者、伝統的産業の保護育成に従事してきた行政担当者、さらには伝統工藝とその周辺に長らく注目し

てきた記者・ジャーナリストといった方々の参加も得た。制作者、経営者、流通業者、享受者と研究者との共同作業により、現場の知見を持ち寄ろうと試みた。とともに、失われゆく現場の姿を文字・音声・映像記録にとどめ、そうして得られた情報をもとに、学問領域を横断した展望を集約する。そして、それらを基礎として、できることならば将来に向けて、伝統工藝の再生と、そのあらたなる展開に向けての提言をまとめたい。それが、平成十五（二〇〇三）年の船出の段階での、当初の目的だった。

そこには従来までの学術的な共同研究会に対する方法論的な反省も込められていた。まず、学術の殻を破り、産業界や行政の現場と積極的に接触して、産学協同の可能性を模索したかった。一口に工藝というが、実際には業種別に縦割りで、隣接領域同士にほとんど交流がない。そうした京都の伝統工藝のありかたを乗り

越え、問題意識を共有し、連帯の可能性を探ることはできないか。そのためには現場と学術との橋渡しに期待が寄せられていた。ふたつめに、従来の研究者主催の研究会では、とすれば頭脳労働に偏り、実際の技法や商取引の現実とは遊離した研究が優先されていたのではないか。学者の専門業績作り中心の視点からは見落とされる「非学問的」側面にも照明を当てたいとの願望があった。そうした土台に立って、第三には、技術史、社会史、経済史、産業史、美術史などの分野を横断した、学際的・総合的な研究こそ、共同研究の主題としてふさわしい、との認識があった。さらに第四には、京都を知るためには、京都以外の地場産業との比較が不可欠であり、京都でしか通用しない閉じた議論を越えるためには、地元の専門家ではない外部の視点も大切だろう。また国際文化都市としての京都の産業を吟味するためには、海外からの視点、非

日本人享受者の関心、さらには京都在住の外国籍の研究者・生活者の意見など、国際的視野を汲むことが望ましい、との配慮もあった。

これら、学際性、総合性それに国際性とは、国際日本文化研究センター設立の主旨に唱われた項目であり、その主旨にそった京都の伝統産業文化の研究会は、センター設立に尽力された、桑原武夫先生なども、強くその必要を説かれていたという。それは初回の研究会でご挨拶頂いた、京都市立芸術大学学長（当時）西島安則先生のご証言であった。だが、本研究書の編者などは、うかつにもこのときはじめて、そうした事実を知った。これに先立つ一九七八年の世界クラフト会議京都国際大会の様子は、本書に納めた美術評論家・吉村良夫氏のご報告にも触れられているが、一九八〇年代の世界デザイン会議なども含め、これまでのさまざまな文化事業の経緯と京都との関わりを直接知る関係者も、今日ではその多くが、あるいは物故され、あるいは現役を引退されてすでに久しい年月が経過している。

こうした事情は、本研究の危うさ、むつかしさをも暗示するものだった。おそらく京都の社会と歴史とを多少なりとも心得ている研究者ならば、おいそれと、冒頭に掲げたような無謀な課題に近づきはしなかったであろう。また、こうした船出の内情からも明らかなおとおり、本研究の開始時点では、先行する研究の蓄積や成果も、継承されることなく埋もれていたに等しかった。かつて京都大学人文科学研究所の吉田光邦氏を中心となつて、京都の工藝に関する基礎研究が進められていた事実や、また「伝統的産業の振興に関する法律」（一九七三年）の施策に連動して、一九七〇年代より実施された大がかりな実態調査の基礎資料の所在にも、編者などは、佐藤敬二氏や岸本康志氏のご教示で初めて蒙を啓かれる有様だった（巻末参考文献³⁾および文献案内①二二六頁、⑦七八二頁参照）。地元の有力な研究者や、不可欠な関係者のご参加を仰ぐにも面識に欠け、その手づるを持つに欠けていたことを認めなければならぬ。

そうしたなか、研究会立ち上げのために実質的な采配をふるってくださったのが、龍村光峯氏だった。そもそも本研究会の実施が、国際日本文化研究センターにおける共同研究会として公式に認められるに至るまでの事情にも、龍村光峯氏のご尽力に負うところがきわめて大きい。その「歴史的」（というべき）経緯は、龍村氏ご自身のご報告にも簡略に触れてあるので、ここでは省略するが、龍村氏をはじめとする方々の貴重なご助言とご推薦に頼ることなくしては、京都内外の主要なメンバーを共同研究会にお招きすることも、とうてい叶わなかっただろう。編者は文字通り左右も分からぬまま、失礼も顧みず現場の職人の方々のお話を伺い、長年京都を土俵として仕事をしてこられた様々な分野の業界や専門家の方々のご意見を拝聴した。そうするなかで、当初の研究計画が、いかに現実離れた空疎な夢想に過ぎなかったかも、少しづつ納得させられてゆくことになった。「共同研究の経緯」は、巻末資料として掲載する（pp. xxxi-xxxviii）。そこでは、研究会の日程を編年的にまとめ、調査の

過程でいかなる進展が見られ、周囲の状況とともにどのように計画が修正されていったのかを、簡単に振り返りたい。もともとより領域の広大さを思えば、今回程度の規模の研究会では、とてもすべての問題を網羅して検討することなど不可能だった。とはいえ、その経緯を報告することは、独立行政法人における、国民の税金で賄われる事業としての最低限の義務であろう。今後、同様の研究を志される方々にとつての指針とまではなりえぬにせよ、研究の途上で明らかになった問題点を指摘し、将来の研究者にとつてのたたき台の役割を果たす。とともに、達成できなかった課題に関しては、後続の調査が同じ轍を踏まないための、せめてもの道しるべだけは残しておきたい。

そうした暗中模索、紆余曲折を孕みつつも、多数の参加者のご協力を得て、ここに三十六篇にのぼる、貴重なご報告を頂戴できた。以下の次節、「本論文集の構成と問題意識」(四―十一頁)では、こうして成った本論文集の構成を述べ、編者としての意図あるいは解釈の一端を提示することによって、読者への誘いに替えたい。個々の論文には、従来知られていなかった新知見の発掘、現状分析への代替不可能な貢献、そして将来にむけての実質的な提言が含まれている。さらに、いくつかの論文は、異なった角度や問題意識から、重なりあう対象や事業を扱い、そこに孕まれた問題を立体的に照らし出している。そうした相互照射の様相や、互いに相補いあう論文の配置についても、次節において簡単に編者なりの紹介を添える。お読みいただく際の指標・道標としてご活用いただけるなら幸いである。

とはいえ、全体としての構成をみれば、なお多くの欠落が残り、議論にも粗密が争えない。各分野のご専門の立場からみれば、なおいかにも不十分、不統一との謗りも免れまい。それは一面では、これだけの紙幅を費やしてもなお覆い尽くせないだけの複雑な問題が、「工藝」の周囲には山積し、錯綜していることの証である。だがそれは他面では、はしなくも編者の力量不足を露呈した結果ともなっていることは、否定できない。

先述のとおり、研究会主催者は、もとより京都工藝の専門家でもなく、古都の事情にも疎く、この研究会を立ち上げるには、およそ最適任者とは言い難かった。三年半におよぶ共同研究会を終えるにあつても、その認識に変化はない。むしろ、一言に工藝といっても、そこには多岐にわたる業種それぞれの問題があり、どれだけの人々の思いや伝統の厚みがそこに重層しているかを、ようやく仄かに納得し始めたに過ぎない。研究会を主催してみて、自らの無謀、無知蒙昧を、ようやく悟らせていただいたというほうが、ふさわしい。それでもなお、あるいは関係者には無配慮このうえない言辞が、本書のそここに顔を覗かせ、思わぬ事実誤認の指摘がなお残っているかもしれない。諸賢のご叱責は謙虚に受け止めたい。

このような、任には堪えがたい共同研究会主催者にもかかわらず、最後まで見放すことなく、貴重なご鞭撻、ご助力、ご叱正を賜った共同研究員の皆様、この場を借りて、編者として、ひとこと御礼を申し上げたい。

編者・共同研究会主催者

稲賀繁美